

り不活潑なるものがあるべきであるから地震に對しては此の種の研究が甚だ必要である。而して恐らく斯くの如き性質は其の斷層が存在する

處の地質學的位置と方向とに依つて大要決定せらるるであらう。

長崎市の生産概況

(昭和三年一月三十日
長崎要塞司令部檢閲濟)

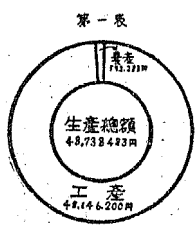
森 壽 美 衛

長崎市の生産額の殆ど全部は工業で農産は極めて微々たるものである(第一表)衰微しつゝも長崎市はやはり商港としての長崎であるが工業的特色も多分に持つてゐる。長崎市は工業によつて今日の壽命を保つてゐると言つても過言ではない。

一、工業

工業の過半は機械器具類で其の大部は三菱の造船である。この汽船の産額は建造ばかりでなく修繕も含んでゐるが修繕は約一割であるから殆ど大部は造船である。三菱兵器製作所の産額

は絶対秘密に附せられて知るに由もないが、從業者より推せばこれ亦相應の巨額に達するであらう。三菱會社の生産は本市生産の大部を占め本市の生命は一にかかつて三菱にあるといふことが出来る

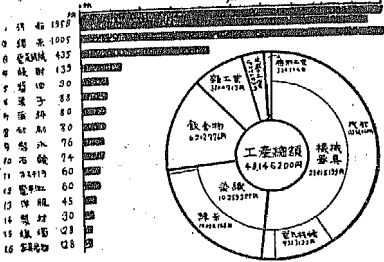


實に港の西岸立神より飽ノ浦方面に亙る壯大なる造船工場船渠を眺めたる時、其のハンマーの響々たる音を耳にする時、亡び行くと言はれる長崎にも一の活路を發見するのである。三菱の景氣の好不況は直に市況に影響を及ぼし

造船艦入船渠の殺到した時は街行く人も一段と笑を浮べてゐる。

三菱の製品に次ぐは長崎紡織會社の綿糸、第三は電氣機械でこれも可成の多額に達してゐる市の名産たるカステーラ、艦甲細工、石鹼等も相當の産額を以てゐて産物の性質、需要等より考ふるも現今の六七十萬圓の産額は先づ多いといふべきである。焼酎は一般に本縣に多く栽培せられる甘藷より造るもので飲食物の第一位である。漁港としての長

第二表 工業額比較



の首位を占めてゐる。鮮魚列車は運轉されても

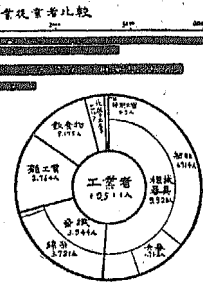
ある。漁港としての長崎では水産加工品はまだ振はない。僅かに蒲鉾の八十萬圓を筆頭に他のカラスミ、鱧鱈、削節、櫻干等合せて二十五萬圓に過ぎぬのは少々心細い。本縣は北海道に次ぐ漁獲高を有し水産としては府縣中の首位を占めてゐる。鮮魚列車は運轉されても

なほ生魚としての販路は狭いのであるから、本縣漁業の根據地たる當市は將來この水産製造にはもつと努力すべきである。製氷の多いのも漁船に供給することが多いからで、積船に便利な浦上川口から灣岸の旭町に數艘の製氷所が並んでゐて黒い導管から碎氷がすさまじい勢で發動汽船に積込まれてゐるのも活氣を添へる。

各種の工業額と従業者とは其割合がほゞ一致してゐるが(別表)細かに各製品に就て一人當年産額を見るに最高は酒類の三萬圓にして之に次ぐは製氷、石鹼、醬油、電氣機械等の一萬圓内外である。造船、綿糸はずつと下つて三千圓足らず、カステーラ、菓子は一萬圓にも達しない。即ち醸造は比較的生産能率高く化學製品に次ぎ人手を多く要する作業は一人の生産高が極めて低い。

以上は主として大正十五年昭和元年中に於ける産額多きものみに就て略説したのであるが更に其等の工場の分布に就ては別圖を参照せられたい。廣き地所を要する大工業地は長崎港の

西岸から浦上川口附近まで、立神、飽ノ浦、水ノ浦、旭町より浦上に至る一線に三菱造船所



長崎市工業業者比較

造船業	2,174
機械業	2,944
電気業	2,721
化学工業	2,521
製糖業	2,321
製粉業	2,121
製油業	1,921
製紙業	1,721
製材業	1,521
製糖業	1,321
製粉業	1,121
製油業	921
製紙業	721
製材業	521
製糖業	321
製粉業	121
製油業	121
製紙業	121
製材業	121

ふまでもないことで三菱其他の造船所が現位置に發達したことは海岸線のみ示したこの地圖でも容易に首肯し得ることと思ふ。三菱兵器製作所及び長崎紡織會社は浦上川三角洲の埋立地を利用し、地積に乏しい長崎では最も當を得たる位置である。且兩者とも表は鐵道長崎本線に沿ひ裏は直に浦上川に臨み満潮時は水運方面もよく利用せられ、水陸の便を有することに於て工

長崎市の生産概況

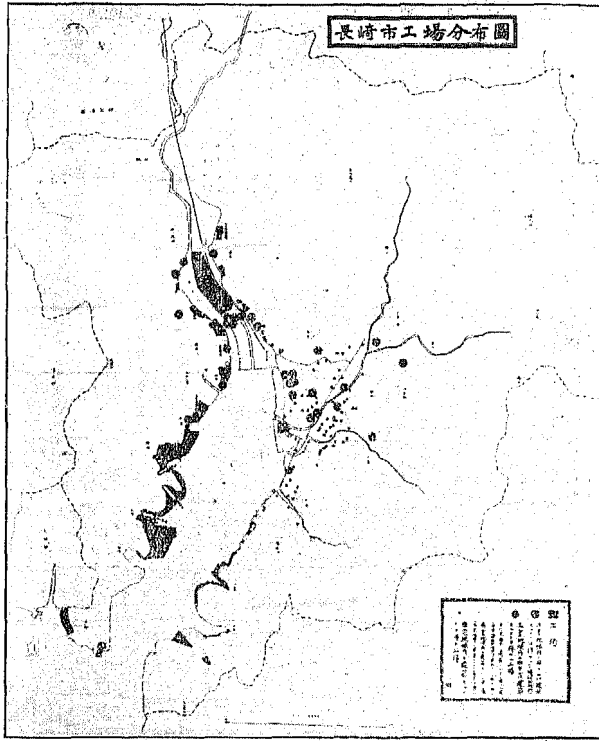
場としては他のすべてのものに比して最もよい位置を占めてゐる。

斯様に工場地は灣の西岸、北岸、南岸に帶狀に連續して、そこに働く従業者も多くは稻佐より立神方面に至る工場の後背地に住してゐる、長崎市を自然人文上の各方面より見て數個の地理的區域に分つときは此等の地は『沿岸工業地帯』として立派に一特色を具へて居る。

次に小工場の多く密集して居るのは市の中央部電車線に圍まれたるほゞ三角形の丘陵地及附近であるが、こゝは『中央商業地域』として長崎市中最も繁華な街區で將來もやはり本市の中心地たるべき所であるから、小工場の數は多くても廣い地域を占有する餘地もなく工業地として色をつけることは出来ない。都市計畫施行の曉にはこれ等は多く北部の新工場地帯に移轉せらるべきものと思ふ。

二、農業

山脚直に海灣に迫る長崎市は近代の埋立地及各小流の溪谷より丘陵山麓まで商店、工場、住



第四表 作物別収量比較

米	687.6
麦	60.4
五穀類	7.0

らう。普通作の穀類と蔬菜とは栽培段別に大差なきも(第四表)産額に於て前者は後者の二分一にも及ばぬのは都會地及附近では蔬菜園藝の有利なることを物語つてゐる。ただし長崎は冬季比較的暖いので同一地面より幾回となく收穫し得られるからでもある。菜類の成熟も速かで秋冬の交のみにも五六回位收穫してゐる。それは本圃の白菜等の未だ成長中にすでに苗床にて次の白菜の苗を相當に培養し置き本圃の收穫後直に大なる苗を移植する法を行つて居るからである。

宅等密集し、農作を營む餘地を存しない。農産額の多いのも極めて當然の事である(第一表)。

農産總額のうち約六割半は蔬菜類である。これは市部又は市附近の農業として普通の型であ

農作地は浦上川流域に多く開け竹ノ久保、城山地方より浦上川左岸一帯は「北西農業地域」として一特色を有してゐる。米麥の栽培は勿論で

